

二〇一一年の夏を、大きな怒りと失望を抱えたまま終えようとしている道民は、少なからずいるのではない。高橋はるみ知事が、調整運転を続けていた北海道電力の泊原子力発電所3号機について、営業運転の再開を認めてしまったからだ。ドイツやイタリアをはじめ、各国で「脱原発」の動きが加速している中、我が北海道のリードは東京電力福島第一原発の事故後では世界で初めて、原発の営業運転再開に踏み出したのである。北海道の名は国際的にも歴史的にも不名誉な名前として知れ渡り、記憶されることになるだろう。

「泊3号機は現に動いており、営業運転再開は『再稼働』には当たらない」との国のお墨付きを得たことで、高橋知事は今回の営業運転再開に関する判断は、「運転の継続」の追認にすぎないと強調する。再稼働と営業運転再開を切り離すことで、今回の営業運転再開は「大したことじゃない」と位置づけたいようだ。だが、原発をどう呼ぼうが、しよせんは文字面の話であり、あえて言えば役所の作文の世界のことではないか。安全性の確保は国に任せただけで高橋知事が原発再開を了承した、という事実は何がどうあっても動かし難いのである。

もっとも、高橋知事がかねてから「原発容認派」であることは疑いようもなく、その意味では、今回の知事の判断には「やっぱり」という嘆息こそあれ、「まさか」という驚きはない。「経済産業省のキャリア

## 専断の陥穽

官僚出身であることを原発容認派であることの根拠に挙げる向きは多いが、本人は原発容認派だとは自称していないようだ。だが、高橋知事の資金管理団体「萌春会」の会長が北電の元会長であること、萌春会には毎年、北電の社長や副社長ら役員が個人献金していること、高橋知事就任後に北電本社と関連会社に道職員計四人が「天下り」していることなど、こうした事実が、知事の政策判断に影響を及ぼしている可能性は高いと言えるだろう。

ただ、今回の件で注目すべきは別の点である。このように高橋知事と「蜜月」にあった北電が、営業運転再開に向けた最終検査の申請に際して、あっさり高橋知事を無視したことがある。北電は八月九日、経産省原子力安全・保安院から泊原発3号機の最終検査を受けるよう指導されたため、高橋知事側の「待つてほしい」との要請を振り切って、最終検査の申請に踏み切ったのだ。

カネとヒトとで密接に絡み合っているにもかかわらず、北電は高橋知事に配慮することより、国の指導に答えることを選んだのだ。保安院による指導はこの時が最初ではなく、北電は何回も受け流していたのだが、この時ばかりは即座に申請に走ったのである。保安院が北電にきつく指導したのかも知れないし、北電側に急いで申請しなければいけない事情が生じたのかもしれない。

だが、いずれにせよ、高橋知事のメンツ

は丸つぶれだった。激怒した高橋知事は、すぐに臨時記者会見を開いて「地元軽視も甚だしい」などと政府を批判した。ところが、知事はこの期に及んでも怒りの矛先を、北電を指導した国に向けており、北電には「残念だ」などと配慮した言い方をしたのだった。どうやら高橋知事と北電の蜜月は、知事の北電に対する「片思い」であったことが透けて見えて来る。

高橋知事の求心力は、自民党が政権与党だったときは「中央とのパイプ」であり、自民党の有力国会議員と親しく、そのことによる経済界の全面的なバックアップが大きかった。ところが、政権交代で野党系知事になったため、その後は経済界と少しづつ距離が出ていた。今回、高橋知事が北電に袖にされたことは、最近の経済界側の空気を反映したものとと言えるだろう。

経済界からも中央政界からも見放され、道職員からの人気も相変わらずいまひとつのようだ。最後のよりどころは知事選の圧勝か。確かに四月の知事選では一八五万票近く取り圧倒的な支持を得たことになっているが、泊原発3号機的一件で、道民もそろそろ気づき始めている。高橋知事が道議会や市民運動が反対しても押し切る独断専行タイプだということを。

高橋知事、実は「裸の王様」ではないか。いや、王様ではなく「女帝」。任期満了まであと三年半、道民はこらえきれぬだろうか。

八木▽